

INDEX

1 理工学部を取り組みを紹介

学部・研究科のFD活動を紹介するシリーズの第4弾。今回は、理工学部を取り組みをご紹介します。

2 全国私立大学FD連携フォーラム(JPFF)を外濠校舎にて開催しました

6月14日(土)に市ヶ谷キャンパス外濠校舎で開催された全国私立大学FD連携フォーラム総会・パネルディスカッションの様相についてご報告します。

3 FDコラム

今回は、児美川センター長によるコラムです。導入・推進と突き進んできた日本のFD分野ですが、そろそろ一度立ち止まって、そのあり方を再考すべき時期にきていることを考えさせられます。

発行：
法政大学
教育開発支援機構
FD推進センター

ホームページ
<http://www.hoseiyoiku.jp/fd/>

問い合わせ先
fd-jimu@hosei.ac.jp

学部・研究科の取り組み掲載のご要望、承ります。

1 理工学部の取り組みを紹介！

第4号では、理工学部の取り組みをご紹介します。

理工学部では、多くの学部教職員や学生との連携による「協働型FD」の確立を目指し、学内外の事例も参考にしながら、独自の実践的なFDに関する取り組みを行っています。ここでは、その一例をご紹介します。

■ 身近なツールからの情報を積極的に活用

理工学部では、「授業改善アンケート」の活用による「教育の質」向上に向けた情報提供を積極的に行っています。これは、FD推進センターからの集計結果だけでなく、学部独自の集計として、自由記述欄とGPAをクロス集計させ、自由記述欄のコメントに対する多角的な評価の指標として活用しています。

また、学部独自の質問も設けており、理工学部での授業改善に必要な学生の習熟度による理解度や関連科目との関係についても情報提供がなされています。昨年度はFD関連委員会による「オフィスアワー」の実態調査と改善点等のアンケート調査も独自に行っており、組織的なFD活動が実践されています。

▲授業改善アンケート用紙（理工学部用）

【学部独自質問】

9. 履修科目の関連科目の履修状況によって、授業の理解度にレベル差を感じたことがありますか。

①はい ②いいえ ③どちらでもない ④ ⑤

10. 授業を履修するにあたり、学生の理解度が授業の運営で問題になると感じますか。

①はい ②いいえ ③どちらでもない ④ ⑤

11. 授業を履修するにあたり、「自主的な学習」をしましたか。

①はい ②いいえ ③どちらでもない ④ ⑤

12. 本授業で習熟度別クラス分けが可能ならば、授業の理解度が向上すると思いますか。

①はい ②いいえ ③どちらでもない ④ ⑤

■ フレッシュマン（新入生）イブニングカフェの開催

理工学部での新たな取り組みとして、今年度より導入したフレッシュマン（新入生）・イブニングカフェを、2014年5月21日(水)に開催しました。

本取り組みは、新入生を対象として、高大接続教育や初年次教育、および授業環境などを含めた学生生活全般に関する意見交換をする場として、その活用を目指したものです。広く「学生の自主的な参加」により、理工学部長、執行部および学部事務の職員を交え、グループワーク形式で楽しく歓談しながら行われました。入学から一定期間後に実施することにより、キャンパスでの授業を実際に体感した上での「授業に関する」貴重な双方向型の意見交換の場としての発展が期待されます。

▼ 参加した学生へのインタビュー ▼

参加しようと思ったきっかけは何ですか。

—記事を見て、滅多にない機会でも面白そうだなと思ったからです。

参加してみて、いかがでしたか？

教職員を含め、愛称で呼び合いながらの歓談だったと聞いていますが。

—教職員と一緒にあったのに、とてもフランクでした。通常、質問をしに行くくらいしか教員と話す機会がないので、だからこそ先生方といろいろな話もできました。

大学に今後期待することは何ですか。

—面白い講義を期待します。淡々と授業をするのは理系っぽいですけど、それだけだとやはり楽しくはないので、すごく数学が好きって人は別でしょうけど(笑)

今回の参加が、教職員との交流のきっかけとなり、学習の幅を広げていくことを期待しています。



2 全国私立大学FD連携フォーラムを外濠校舎にて開催しました



2014年6月14日(土)に、全国私立大学FD連携フォーラムを本学外濠校舎4階にて実施しました。2013年度より、本学が代表幹事校となり、活動を行っています。当日は、12時より幹事会、13時より総会、14時よりパネルディスカッション、17時半より懇親会という4本立てのスケジュールでしたが、全国の大学が集まるまとない機会であり、大変有意義な時間となりました。パネルディスカッションでは、4大学のパネリストをお招きし、アクティブ・ラーニングをテーマにお話いただきました。終了後の参加者アンケートを拝見すると、ひとくちに『アクティブ・ラーニング』といっても多種多様であることを知り考えさせられた、とのお言葉を多くいただきました。



パネリストと講演内容

明星大学 明星教育センター 太田昌宏氏、御厨まり子氏

明星大学でのアクティブ・ラーニングの取り組み — 全学初年次教育「自立と体験1」実践報告と授業外学習への展開—

⇒初年次でアクティブ・ラーニングの基礎(話す、聴く、考える、対話する、気づく)を身につけさせることで、それをベースに専門科目に発展させる重要性、そしてラーニングコモンズの整備実例をもとに、これからのハード面のサポートや利用状況の「見える化」等の運用課題をご紹介いただきました。

■キーワード: 学部・学科の異なるクラスメートとの交流、SAの配置、具体的な授業内容、一問一答インタビュー、教室や図書館ではないオープンスペースの利用

甲南大学 マネジメント創造学部 Brent A. Jones氏

Flipping and Blending Classes for Student Engagement

⇒学習者を継続的に惹きつけるために、学生に「経験」をどのようにさせるかについて、ビジネスフレームワークを教育へ置き換えたモデルの紹介と、今話題の反転授業についてご説明いただきました。

■キーワード: ビジネスモデル、フレームワーク、フィードバック評価、理性と感情、反転授業

関西大学 教育推進部・教育開発支援センター

三浦 真琴氏

関西大学におけるアクティブ・ラーニングの取り組み — ハイブリッド型授業で学生をアクティブ・ラーナーに育てる—

⇒アクティブ・ラーニングは、手法ではないことの説明を皮切りに、学生を能動者(アクティブ・ラーナー)に育てていくためには、教員はTo teach(教える)からTo coach(引き出す)を実践していく必要があることや、学生の参加・参画・支援の授業について、ご説明いただきました。

■キーワード: アクティブ・ラーナー、アクティブ・ラーニング、学生中心主義

立教大学 経営学部 BLP主査/GLP主査 日向野 幹也氏

立教大学のBLP/GLPの発展—学生のリーダーシップと教員のリーダーシップ

⇒立教大学が採択された教育GPであるBLP(ビジネス・リーダーシップ・プログラム)について立ち上げ事例をもとに、リーダーシップのあり方についてや、アクティブ・ラーニング科目の開始前に初歩のリーダーシップ教育をすることで、以降の専門授業への効果が発揮されること、教員のリーダーシップではなく、学生のリーダーシップが重要であることなどについてご説明いただきました。

■キーワード: BLP、アクションラーニング、アントレプレナーシップ、学外評価、学部での取り組みと問題点、SA

《FDコラム》 失われつつあるFDの「純真」? 児美川 孝一郎 (教育開発支援機構FD推進センター長)

気のせいかもしれないが、この国の高等教育政策において、大学教育の「質保証」が声高に叫ばれるようになった頃から、各大学が取り組んでいるFD活動は、その性格をだいたい「純真でないもの」に変容させてきたように感じる。

郷愁の念を込めて、あえて漫画チックに書けば、「まあ、これまでの大学教育は、学生の優秀さの上にあぐらをかいてきたわけよ。これからは、大学も大衆化の時代だ。授業だって学生指導だって、少しは創意工夫しないといかんぞ。それは、学生のためだし、実は教員だって、そのほうが楽になるってもんだぜ。お互い、いろいろチャレンジしてみて、その結果を交流しようや」といった(居酒屋談義のような)牧歌的なFDには、もはや存在の余地が与えられていない。今やFDとは、大学の「認証評価」やそのための「内部質保証」の活動とも深く結びついた組織的な取り組みだからである。

かの中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年)は、各大学・学部等でのディプロマ、カリキュラム、アドミッションに関するポリシーの明確化と、その実現に向けた努力を求め、その後の大学教育改革に大きな影響を与えた。その答申には、まさにその「学士課程教育における三つの方針」に関する「共通理解を確立し、教員各自の教育実践の在り方を主体的に

見直す場としてFDを機能させ、活性化を図る」必要性が宣言されていたのである。大学設置基準においても、この年から、各大学がFDに取り組むことが「義務化」された。

つまり、論理としては、入れ子構造になる。FDは、各教員が「主体的に」取り組むべき活動であるし、そうではないと意味をなさない。しかし、各教員が「主体的に」FDに取り組むように促し、組織化・制度化し、点検・評価していくことを、各大学は国から「義務」づけられている。誤解を恐れずに言ってしまうと、「主体性の発動を強制する」という矛盾を孕む「舞台」の上で、各大学のFDは踊らされているのではないのか。

冒頭にFDの「純真」が失われつつあるのではないかと書いたのは、まさにこの「舞台」への、その「演出装置」への、筆者の違和感に由来している。そもそもFDには、二つのベクトルがある。教員同士の同僚性や学部等の教育文化を基盤とし、相互の交流や研鑽を通じて、それを全体に広げていこうとする、いわば「ボトムアップ」の活動のベクトル。もうひとつは、上から組織化・制度化され、全体に浸透させていくという「トップダウン」の活動のベクトルである。大学教育の「質保証」以降のFDでは、どうしても後者が優勢となるだろう。

そうすると、授業や教育改善に向けた共通の「基準

や「指標」等が持ち込まれ、PDCAサイクルを回すがために、それらが数値化される。組織的な点検・評価もはじまる。講義型の研修がダメだとなると、ワークショップ型がやたらと流行ることにもなる。一般の教員を「支援」するためのFDの専門家も導入される。一事が万事であって、その結果として、フツの教員が教育者としての「主体性」(というか、意欲)を奪われ、「やらされ感」ばかりを募らせるのだとすると、FDとは、いったい何のためにあるのか?

筆者はもちろん、「トップダウン」型のFDの推進やそのための環境整備が不必要であるとか、意味がないなどと言いたいわけではない。全体の底上げとレベルアップのためには、それも求められよう。だが、そのことが「角を矯めて牛を殺す」事態にならないためにも、たとえ牧歌的と言われようが、理想主義に過ぎると揶揄されようが、今こそ奮勇を振るった大学教員たちによって、「ボトムアップ」タイプのFD活動が多種多様に生成し、FDの「純真」が輝いていくことへの期待を、心の底から叫びたいと思っている。

(出典: 全国私立大学FD連携フォーラム News Letter No.6, 7頁/2014年3月発行)

